

福祉交流新聞

THE FUKUSHI KOHRYU SHINBUN

平成8年11月20日(水)

発行所 福祉交流新聞社

〒620-03 京都府加佐郡大江町日藤42

☎0773-56-1941

ファックス0773-56-2051

動物にふれて心身のケア

第 8.11.1
みずなぎ

人間は動物といろいろな形でかかわっている。犬や猫といったペットはもちろん、そのかわり方に応じて、産業動物、実験動物、野生動物などに分けられる。その中で最近、注目されているのが「コンパニオン・アニマル(伴侶動物)」による動物介在療法と動物介在活動である。動物とのふれあいを通じて高齢者に心の安らぎを提供しようとするこの試みが両丹地方でも行われている。

京都府でも開始された「動物介在療法」

日本で「コンパニオン・アニマル」という言葉が使われ始めたのは一九八五年ごろのこと。コンパニオン・アニマルとは、愛玩用のイメージが強い「ペット」に対して、人と対等に近い立場で人の生活を精神的に支え、あるいは人の生活に密着した愛情の対象として不可欠な存在となっている動物のことである。

そのコンパニオン・アニマルを連れて獣医師やボランティアが各種福祉施設などを訪問し、ふれあいの場を設けることで、お年寄りや児童、心身に障害のある人々に対し精神面

とリハビリテーションの助けをする活動が「人と動物とのふれあい運動」(コンパニオン・アニマル・パートナーシップ・プログラム(CAPP))である。

もともとアメリカで提唱されたこの運動を、社団法人日本動物病院福祉協会(東京都新宿区)が導入、一九八六年五月に横浜市の特別養護老人ホームさくら



寿荘でも月に一度の訪問を心待ちにしている

苑で初めての訪問活動を行った。以来、今年三月までに百五十五の施設を千百九十六回訪問。その間、四千六人の獣医師と一万二千八十六人のボランティア、一万二千六百七十八頭の動物が参加した。その結果、たとえば、動物に声をかけることで発声のリハビリとなった。

◆動物に触れようとすることが全身のリハビリにつながった
◆自他共に不自由だと思っていた手足が動かせるようになった
◆会話の少なかった高齢者同士が動物の話題で話すようになった

◆無表情だった人に表情力が回復してきた
◆などの効果を生んでいる。そしてその活動が高く評価されるにつれ、受け入れ施設側からの需要もますます高まってきているという。

京都府北部では、舞鶴市の動物ボランティアグループ「ハーモニ」がこの活動を実践している。同会は一昨

年七月に設立、現在会員は三十五人。昨年五月から訪問活動を開始し、同市上安の特別養護老人ホーム寿荘へ月一回、同市鹿原の知的障害者施設みずなぎ学園に二月月に一度、出かけているが、「動物と接している時はふだんと比べて明らかに表情が明るい。月に一度といわず、回数が増えれば、さらには効果が出るのでは」と、寿荘の関係者はかなりの期待を寄せている。

また、この十月には加悦町の特別養護老人ホーム与謝の園に同様のグループ「タッチ」が結成された。

京都府でも行政としてこの活動に注目。この九月から保健衛生部と動物管理センターが主体となって本格的な活動を開始しており、十一月中旬までに六カ所の高齢者施設や障害者施設を訪問した。近畿圏では滋賀県が取り組んでいるが、全国的にも自治体が訪問活動を行っているところは少ないという。